風切るつばさ

六東書

木村 裕一 文
黒田 征太郎 絵

①それは、夕ぐれどきの一瞬の出来事だった。若いアネハヅルの群れが、キツネにおそわれたのだ。ツルの群れはパニックになる。気がつくと、一羽の仲間の命が失われていた。その一羽は、まだ幼い鳥だった。

②モンゴルの草原の、うず巻く風の中で、傷ついた群れは、無言の夜をむかえた。だれの心の中にも後悔がうず巻いていた。あのとき、もっと早くにげていれば……。あのとき、すぐキツネに気づいていれば……。二度ともどらない命への思いは、堂々めぐりを続け、くやしさだけがつのっていく。その思いのはけ口など、どこにもない。

「あのとき、だれか、羽ばたいたよな」。

③だれかが口を開いた。

「クルルがカララにえさをとってやったときか？」

④クルルはときどき、体の弱いカララに、とったえさを分けてやっている。

「キツネに気づかれたのは、そのせいだよ」。

「あんなときに、えさなんて分けるんじゃないよ」。

「おれは前から、ああいうクルルが気になってたんだ」。

⑤いかりの持っていき場が見つかったとばかりに、みな、口々にクルルにきびしい言葉をぶつけてくる。

（あのとき、羽ばたいたのはおれだけじゃない。キツネは、その前からねらっていたんじゃないのか。カララにえさをあたえたことと、本当に関係があるのか。）

⑥そんな言い訳などおしつぶされそうな雰囲気に、クルルはだまるしかなかった。

⑦そのときからクルルは、まるで仲間殺しの犯人のようにあつかわれるようになった。だれ一人、かれの味方はいない。カララでさえ、だまってみんなの中に交じっている。仲間、友達、今まであたりまえだったもの全てが一変した。みな、かれに背を向け、口をきく者さえだれもいない。クルルの気持ちなど、だれ一人分かろうとしないのだ。

⑧友達も仲間も何もかもが信じられない。たった一羽でいるしかなくなった、みじめな自分。クルルはそんな自分を責めた。風の中を飛ぶ自分のつばさの音すら、みっともない雑音に聞こえる。

「あのとき、どうして言い返さなかったんだ。みんなとうまくできない自分がくやしい。こんな自分がいやだ。自分の顔、自分のあし、自分のつばさ、みんないやだ」。

⑨クルルはみんなと飛ぶことがつらくなってきた。

⑩ある朝、クルルは飛べなくなっていた。いつものように羽ばたいているのに、体がまい上がらないのだ。クルルは、ただじっと草原の片すみにうずくまるしかなかった。

⑪冬が近づいてくる。冬のモンゴルの草原は、零下五十度の寒さにおそわれる。その前に、アネハヅルの群れはヒマラヤ山脈をこえてインドにわたっていくのだ。

背 せなか　そしてやがて

片 かた

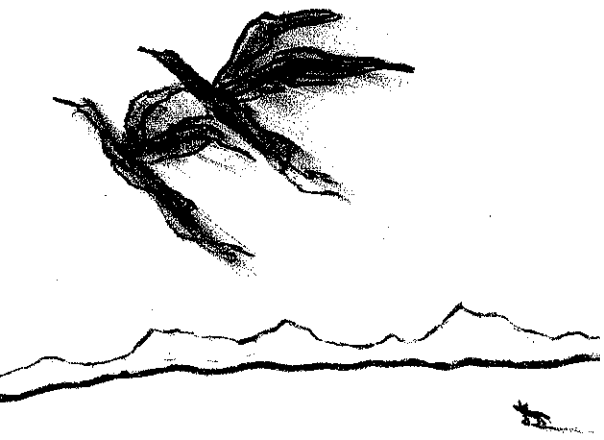
⑫冬を前にして飛べなくなったツルは、死ぬしかない。でもクルルには、そんなこと、どうでもよくなっていた。えさを食べず、ただじっとうずくまっていることだけが、おしつぶされそうな最後のプライドを保つ、ゆいいつの方法に思えた。

⑬やがてツルの群れが、南に向かって飛んでいくのが見えた。第二、第三の群れもわたり始める。

⑭白い雪がちらほらとまい始めたときだ。クルルの目に、南の空からまいおりてくる一羽の鳥が見えた。カララだ。カララは何も言わずにクルルのとなりにおり立った。クルルは、もしカララが「さあ、いっしょに行こう！」と言ったら、たとえ飛べたとしても首を横にふるつもりだった。「おれなんかいらないだろう」。とも言うつもりだった。でも、カララは何も言わなかった。ただじっととなりにいて、南にわたっていく群れをいっしょに見つめていた。

⑮ 日に日に寒さが増してくる。
（こいつ覚悟してるんだ。）
⑯ クルルの心が少しずつ解けていく気がした。
（そうか、おれが飛ばないとこいつも……。）と思った、そのとき！　いきなりしげみからキツネが現れた。するどい歯が光り、カララに飛びかかる。
「危ない！」
⑰ その瞬間、クルルはカララをつき飛ばすように羽ばたいた。カララはそれを合図に飛び上がった。
「あっ……。」
⑱ 気がつくと、クルルの体も空にまい上がっていた。目標を失ったキツネが、くやしそうに空を見上げている。
「おれ、飛んでる。」
⑲ クルルは思わずさけんだ。力いっぱい羽ばたくと、風の中を体がぐんぐんとのぼっていく。

危（キ）あぶない



⑳ 風を切るつばさの音が、ここちよいリズムで体いっぱいにひびきわたった。
「わたれるぞ、これなら、あのそびえ立った山をこえることができるぞ。」
㉑ カララがふり向いて、
「いっしょに行ってくれるかい？」
と言った。
「もちろんさ。」
㉒ クルルも少し照れて笑ってみせた。
㉓ 二羽のアネハヅルは、最後の群れを追うように、南に向かった。つばさを大きく羽ばたかせ、どこまでもどこまでも……。